

ハコネ庭園支援

1. はじめに

2014年2月、小形会のメンバーを中心とする庭園技術者総勢13名（日本から11名、北米1名、カナダ1名）は、米国カリフォルニア州サラトガ市にあるハコネ庭園（Hakone Garden）内「石庭（禅の庭）」の修復支援を行った。1917年にスタイン夫妻の別荘として1917年に建設が始まり、その後、所有者の変遷を経て1984年、ハコネ財団が設立され現在に至っている。作庭当初の庭園手法を垣間見ることができる歴史的文化的価値を有した庭園**である。作庭から97年を経た現在、老朽化に伴う庭園形態の変化や利用者ニーズの多様化など、維持管理と運営の両面から整備・修復と時代に即した庭園への改修が指摘されていた（土沼2006）。整備修復や改修にあたっては、歴史的な文脈や作庭当初の形態やコンセプトを尊重することを基本とした上で、専門家と財団が緻密な議論を繰り返し重ね、中長期的な視点での管理方針と利用者ニーズに添った改修計画の立案とそれをもとに工事が実施された。今、海外における公開日本庭園の多くが、老朽化や石積・護岸の崩壊、管理運営面から修復や改修などの問題を抱えている。特に改修などでは各庭園の特色や庭園の持つ本質的価値を失うことなく、将来に渡って地域性に根差した愛される日本庭園であるために、日本人技術者の責任において果たすべき役割や支援の形とは何かを考える1事例として、本稿で紹介する。

1. ハコネ庭園

米国カリフォルニア州サラトガ市はサンフランシスコから76km南東サラトガ山の麓に位置する人口3万人程の小規模都市である。ハコネ庭園は同市の中心部から約2km南西のサラトガ山麓に築かれている。

当庭園を築いたのは、オリバー・スタイン氏（Oliver Stine; 1877-1918）と夫人のイザベル・スタイン氏（Isabel Stine; 1880-1959）で、二人は1915年サンフランシスコで開催されたパナマ太平洋国際博覧会（サンフランシスコ万博）で日本文化の紹介展示に感銘を受け、その翌年1916年に日本を訪れている。1917年日本から大工・新谷常松氏（1877-1921）を呼び寄せ、1918年には敷地内の斜面中腹に日本建築、上の茶屋（月見台）を築造。その後1922年には下の茶屋を築いている。作庭には庭師・相原直治氏（1870-1940）を日本から呼び寄せ、1919年から築庭が開始された。1997年、庭園管理運営のため箱根財団が設立され、1984年にはサラトガ市と京都・向日市は姉妹都市関係が結ばれ、1987年には記念事業として竹庭（絆園）が築庭された。2005年、庭園のアドバイザーとして造園家・土沼隆雄が招聘され、その翌年、管理運営の方向性を示した総合基本計画書を作成し、2009年、2011年と小形会による庭園修復支援が行われた。2011年には新潟市にある北方文化博物館とハコネ財団とが姉妹庭園関係を結び、技術、人、情報の交流が現在まで活発に行われてきている

庭園は、山林を含む敷地面積約72,000㎡（21,800坪）で、サラトガ山麓の南斜面を利用して作庭されており、池泉庭、茶庭、禅の庭（石庭）、竹庭（絆園）で構成されている。

3. 石庭（禅の庭）修復の概要

石庭は敷地の北西に位置し、1922年にスタイン家が避暑静養の場として建設した「下の茶屋」の東庭である。「下の茶屋」は当初浴室や暖炉を完備した西洋風の建物であったが、1980年にサラトガ市が公有化した折に市民交流の場として利用できるように、茶室二間と板張りの広間（レセプションルーム）とに内装を再建築している。建物に入る園路動線は、当初、庭園東側中央に設けられた庭門から建物入口へと続いていた（写真0）が、アメリカ障害者法（ADA: Americans with Disabilities Act）から車椅子でも施設内に入れるような園路動線の変更の必要性が生じ、そのため2011年に建物北側側部にスロープが設置された。ここから建物内へアクセスが容易になったことにより ①既存の園路動線が必ずしも必要ではなくなったこと、②もともと既存園路が石庭を中央から二つに分断する動線であったこと、などから動線を再整備し、石庭部分を大きく修復する計画が持ち上がった。加えて管理者側から課題として挙げられた ①雨落ち部分の拡張、②1922年建設当初からある沓脱石と調和のとれた園路の再構築、③庭を分断する園路があ

ったために不完全になっていた築地塀の囲繞確保なども修復計画に追加された。修復の計画立案と施工監督は東京・赤坂の造園家・星野司郎が務め、小形会のメンバーを中心として日本から 11 名、北米・カナダから 2 名、計 13 名の技術者とこれより先、現地で庭園技術支援者として赴任していた高橋伸弘及び庭園管理責任者・ジェイコブ・ケルナーと共に石庭の整備（正味 7 日間）が実施された。



1920年代



2010年代



2010年代

2. 石庭（禪の庭）修復のコンセプト

Concept: stillness and movement is beautifully harmonized.

Path way

[Function] Turning the drip/drainage line to be the stone-work path also enables visitors to enjoy the garden from outside. Thus, visitors take a look at the garden both from inside and outside the house.



完成



完成



施工中



完成

完成



施工前

施工に先駆けて、2013年11月より着任していた高橋伸弘と庭園管理責任者のジェイコブ・ケルナーらによって事前に計画に沿った既存園路の撤去がなされ、これに加え庭園の南側と東側の一部のみに新たに築地塀が延長され設置されていた。修復支援の一団が到着してから行った整備は、①雨落ち部分の拡幅と修景、②御影切石の沓脱石の据え付け、③自然石沓脱石の再設置、④クロマツ、ビヤクシン、灯籠の移植と再設置、⑤既存の景石を使った石組、⑥築地塀下の差し石の設置、⑦庭門とそれに続く延段の設置である。庭園修復のコンセプトは、落ち着きのある静かな石庭を広くとる一方で、庭園北側に既存のクロマツや新規にアセビ、モミジなどを植栽して植物の季節性変化を感じられる動きのある庭をつくることであった。庭の中央に植栽されている樹高約2.5mのクロマツは近景としては大きくなりすぎたこと、庭園を小さく感じさせてしまうことなどの理由から灯籠と共に庭内の北側に移植・再設置され、これにより拡張された石庭部分のスペースに、既存のものと新たなものを合わせて11石使い、石組みが施された。



施工中



完成



施工中

3. おわりに

本稿で取り上げた箱根庭園は作庭から現在ほぼ100年を迎えようとしている。北米に限らずこれまで世界に造られた公開日本庭園は540以上にのぼり、今後も整備修復や改修が迫られる庭園が出てくることだろう。これら世界の日本庭園が抱える課題に対して、日本人技術者が積極的に技術支援を行うと同時に、現地での文化交流を介した人脈づくりや情報ネットワークを強めていくことが重要である。消えゆく庭園が数多くある中で、一つでも多くの日本庭園が今後も将来に渡って海外の土地で根差し、愛される庭園として社会に役立つことを願っている。